教材研究ノート№3-A-6

①本時を構想する上でポイントとなる素地

○問題解決のための知識・技能

・包含除や九九を使って余りのある割り算の計算ができる。

○既習とつなぐ見方・考え方

・4つのグループを作るには，割り算で計算すればよいことを学習している。

○共同追究でのゆさぶり

・あまりの大きさを考える経験は初めて。

○ゆさぶりに対応する経験

・数図ブロックで4つの組をつくり，あまりを計算する方法を学習している。

≪学習問題≫

19人が4人ずつ組になってダンスをします。何組できて何人あまるか求めるのに，つばささんとみらいさんは，次のように考えて計算しました。

　つばさ　19÷4＝3 …7

みらい　19÷4＝4 …3

2人の計算を比べてみましょう。

≪学習問題≫



主眼

授業計画･実施記録

１　課題とまとめを一体のものとしてとらえるには

②見通し:同じ人数ずつの組を作るから，割り算でできそうだ。

→4×5＝20だから，割り切れないのであまりが出そう。

②学習課題:数図ブロックや九九を用いて19÷4の計算方法を考え，つばささんとみらいさんの考えを説明しよう。

③個人追究:2人の計算方法を再現し，考え方を説明する。

④共同追究前半（解法の比較検討）

「2人の考えの違いは何だろう？」

→「みらいさんは，これ以上4人組ができない所まで計算しているが，つばささんは，余りの中にまだ4人組が1組できる。」

④共同追究後半（思考を深める）

「割る数より余りの方が大きいと，なぜいけないのだろう？」

→「余りが割る数より大きければ，答えがもう1つ増えることができてしまう。」

　「割る数が4ならば，16÷4＝4…0　17÷4＝4…1

　　18÷4＝4…2　19÷4＝4…3となり，あまりが0，1，2，3を繰り返す。」

⑤まとめ（児童生徒の言葉で）

・割り算のあまりは，いつも割る数より小さくなるようにする。

・割る数が4の場合の割り算のあまりは，0，1，2，3を繰り返している。

⑥定着･活用問題

下の計算のまちがいを直しましょう。

(1) 26÷3＝7…5　 　(2) 43÷6＝6…7

≪定着・活用問題≫

＜本時の展開に当たっての留意点＞

・割り切れることを「余り0」と見る見方が，余りのきまりを発見する上で重要な鍵である。また，これによってすべての割り算が余りのある割り算として一般化されることにも気付かせたい。

・本時の発展として，カレンダーの各曜日の数に着目させることにより，日曜は7で割り切れる数，月曜は7で割って1余る数，…という発見から，生活と算数の関連に関心を持たせるとよい。

【板書計画】